4 平成2年(1990年)4月10日 教皇様の声 (昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
APRIL, 1990 毎月10日発行 第120号

教皇様の声

苦しむ人々との交わりは
教皇職の助け

1 ドン・ボスコゆかりの地を歴訪しての旅も終りに近づきましたが、試練をうけて苦しんでいる皆さんとの出会いをなおざりにするわけにはいきませんでした。「皆さんは常に、私の巡礼にあたっての愛の対象であり、私の聖務における愛の的です。」私は真心こめて御挨拶いたします。そして皆さんに会えた喜びを、皆さんの試練と立場を共にわかちあえる喜びを申し上げたい。

2 苦しみは救いと聖化に必要な道です。聖人になるには、あれこれの賜に欠けていても適性に欠けていてもよいのですが、苦しみを免除されることはあり得ません。苦しみは聖性に必要な要素です。愛もまたそうです。キリストが教え、自ら実践し示された愛は、十字架上の愛、苦しみを通して贖われ、救われる愛です。愛は苦しみより重要です。それは愛が苦しみに意義を与え、苦しみを喜んで受け入れさせるからです。苦しみを受ける者に喜びを与えます。苦しみのない愛もあります。しかし、愛のない苦しみは意味がありません。キリストや聖人たちが受け入れたそのような愛あってこそ、苦しみは測り知れない価値をもちます。

3 親愛なる兄弟姉妹の皆さん。皆さんが福音的愛で満たされ、その愛が苦しみを変え、苦しみを和らげますように。主イエズスが試練に耐える力を与え、皆さんに平安をもたらしてくださいますように。皆さんの魂が肉体の苦痛に負けることなく強靱でありますように、そして平安で満たされますように。皆さんが回復されるよう心から主にお願いしましょう。私はまた、心の生命である恩寵をお与えくださるようにお願いしましょう。皆さんがいつでも神秘的な神の御旨を喜んで受け入れることができるように祈りましょう。最後まで戦い抜かれることを祈りましょう。苦しみという福音の真髄を汲みとり、自らを啓蒙されるよう祈りましょう。キリスト教道徳の本来の中心的価値、キリストがまず実践し教えられた人生の知恵の真価はここにあります。これこそ他のどんな徳行にもまさって永遠の救いの原動力であり、決定的な力です。それは常に価値をもち、意義づけられます。

4 兄弟姉妹の皆さん、私がどんなに皆さんを頼みにしているか、教会がどれほど皆さんに期待を寄せているかご存じのことと思います。聖務に携わる時、また巡礼の途にあって皆さんとの触れあいは、私の聖務が本物であること、その効果と神秘的で深い霊的一致の保証となります。このようにして私は人間の救いの跡をたどることができるのです。神は苦しみを通して語られます。神は新しい道を拓き、新たな視野を開かれます。そして勇気と自信をもってそれらに立ち向う力を与えられます。主なる父が示され、あるいは命じられる仕事を遂行する力を与えてくださいます。

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1990
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

前にも申し上げたように、私たちは各々自分の務め(役目)、この世での特別な役割をもっています。真実を求めて苦しみ、正義のため、平和のため、人間社会の救済のために苦しむこともあります。キリストにおいて苦しみに耐えることにより、神の子となることができます。

師キリストに苦しみの意義を示してくださるよう願いましょう。私たちは忌み嫌いますが、キリストにあっては霊的価値の高いこの苦しみの神秘から、何か学びとるものがあります。シエナの聖カタリナは、十字架はあらゆる徳を学ぶ場であると言いました。私たちは本当にそう信じているでしょうか。キリストが救いをもたらす苦しみについて教えておられることを完全に理解することこそ、今の世で一番大切な課題です。この世で立派に生きるかどうかは私たち次第です。この世の、また来世の幸せは私たちの生き方にかかっているのです。

5 親愛なる兄弟姉妹の皆さん、私が愛をこめてお話ししたことを御自分の考えにしてください。そしてこの考えが皆さんの内でこだまし、やがてそれらを宝物として大切にされるよう望みます。(…)

イエズス御自身が皆さんに報いられるでしょう。そして皆さんが望むような慰めをお与えになることでしょう。それはイエズスしか与えることができない慰めです。主の御名によって、ここにおられる方々、来られなかった方々、また一緒に来られた方々を祝福します。

神が皆さんと共にいらっしゃいますように。

(病と障害に苦しむ人々に向けて、八九・九・四)

復活祭は
最初の聖霊降臨

復活の夜、蘇ったキリストが弟子たちに仰せになった言葉、贈物であると同時に約束である言葉が教会全体に響き渡ります。「聖霊を受けなさい。」(ヨハネ20・23)

私たちは今、復活祭に固有な喜びにあふれた雰囲気に浸っています。典礼暦年のこの恩寵の季節において復活の秘儀と聖霊降臨とがつながってきます。

復活によって、贖い主の救いの計画が完成し、無尽蔵の神の愛がすべての人の上に豊かにそそがれました。そして今、この愛の計画の中に個個の人間を組み入れて行くのは聖霊の仕事です。というわけで、御受難の少し前に、十字架の実りとして弟子たちに約束された聖霊の賜と、キリストの使命との間には密接な関係があります。「私は父に願おう。そうすれば、父はほかの弁護者をあなたたちに与え、永遠にともにいさせてくださる。それは真理の霊である。

(…) 聖霊はすべてを教え、あなたたちの心に私の話したことをみな思い出させてくださるだろう。(ヨハネ14・16、17、26) まことに意味深いのは、死に瀕したキリストが贖いの最初の実りとして「息を引き取られた」、すなわち霊を委ねられたことです。(ヨハネ19・30参照)

したがって、復活祭は最初の聖霊降臨とも言えるのです。「聖霊を受けなさい」という言葉は、五十日後、高間に集う初代の共同体の上に荘厳かつ公に聖霊が下るのを、待ち望み、期待させるものです。

「イエズスを死者からよみがえらせた御方の霊」(ローマ8・11) が私たちの中にお住いになり、私たちをもっとキリストに似たものとさせる生活に導いてくださらなくてはなりません。救いの秘義ぜんたいは三位一体の愛のわざ、聖霊における御父と御子の愛の働きです。復活祭は「生命の与え主」(ニケア・コンスタンチノープル信経) 聖霊との交わりを通して私たちをこの愛の中に導き入れてくれます。

＊＊＊

復活祭にマリアをたたえる「レジナ・チェリ」(天の元后、喜びたまえ) を唱えるために集まった私たちは、聖霊の賜について黙想することにしましょう。聖霊が最初に下り、いと高き者の力が覆った御方を思いつつマリア様の助けをお願いし、聖霊の賜を深く理解したいものです。聖霊降臨を待ち望みながら、教会の祈りに加わっておられたマリアのこともぜひ思い出しましょう。

(四・二)

シノドスと私たち

司祭の形成のために

兄弟姉妹の皆さん。

I 今日は待降節第一主日です。教会は熱意を新たにして待ち焦がれています。まぐさおけの中に遣られた主の御降誕、そして栄光に包まれた最後の来臨を待望します。

あいまいで緩慢な期待ではありません。「すでに」やって来たクリスマスと「まだ」実現していないキリストの来臨の間、教会は全力を尽して全世界に向って宣教しなければならないと思うのです。この仕事を成し遂げるには、教会に属する全ての人の努力が必要ですが、中でも特に教会の司祭が果す役割は重要です。

そこで、来る一九九〇年十月に開かれる世界代表司教会議 (第八回定期総会) では、「現代の状況における司祭の形成」というテーマで討議されます。

日曜日のお告げの祈りの集いが、今日もこれからも、教会の生命にとって重要な問題を討議するこの会議に目を向ける良い機会となることでしょう。

II 一九七一年の世界代表司教会議では、職位的司祭職について討議されました。福音書に基づき、第二バティカン公会議の教えに従い、司教たちはいくつかの基本的教義を想起し、司祭職と生活様式について適切な指針を提示しました。そこで表明された規範は今もなお私たちを啓発する力をもっています。

けれども、今司祭の生活が多くの困難に遭遇していることを考えれば、現代世界の要求に十分に答えうる適切な形成が早急に必要であることは明らかです。従って、司祭の形成についての深い考察を重ねることによって、職位的司祭職についての考察を完成させることは時宜にかなったことといえるでしょう。

司祭の召出しは、恩寵の賜、無償の呼びかけであり、神の愛より生じるものです。決して、司祭の生活を単に人間的な昇進と考えたり、聖職者の使命を個人的な計画(プラン)として考えることはできません。いかなる時においても司祭は、イエズスの特別の召出しを受けた者であることを自覚し、職務を果すために全てを捧げなければならないのです。

神からの召出しに十分に答え、多くの実りを得るためには、恩寵がまいた種の可能性を発展させる形成が必要です。ところで、司祭として献身的な生活を送るべく召された一人ひとりを助けるために教理上の形成と霊的な形成がなければ、恩寵の種を実らせることはできません。

III この形成こそ、司教と、司祭職が成長して成果を収めるために協力するすべての人々の関心事です。しかし、全信者がこの形成に加わらなければなりません。皆が司牧上の権能をもつ人々とこの関心を分かちあい、司祭の形成のために祈るよう求められています。私たちすべてが、十月に開かれる世界代表司教会議の上に神の恩寵を願わなければなりません。

聖母が良い知らせを初めてお聞きになった時の心と同じ心をもって、一人ひとりが世界代表司教会議の表明に耳を傾けましょう。

(昨年の十二月三日)

苦しみの意味

真理と自然法に反する医学的解決法について

医業の役目は、教会の役目がそうであるように、人類に奉仕することです。特に病気で苦しんでいる人々の役に立つことです。この崇高な使命という光を帯びて、私は皆さんの天職の倫理的な面について一緒に考えたいと思います。

麻酔医は、事故で傷を負った人の痛みを取り去ったり、何らかの理由で手術をやむなくされる人やその他の医療看護を受けねばならない人の痛みを和らげようと努めておられます。医療に際しては、常に他の専門家と協力して可能な外科処置をしたり、他の治療形態をとったりします。どの場合にも、病気で苦しんでいる人々を助けるためにその才能を発揮し、専門知識を生かします。

しかし、よく御存じのように、どんなに献身的にあたって、その努力が効を奏しても、苦しみという現実を完全に取り除いてしまうことはできないものです。一時的に痛みを止めることはできるでしょう。多くの場合、極度の痛みでも相当和らげることができるでしょう。が、苦しみや痛みというものは、この世で誰もが経験するもので、どうしても避けられないものです。従って、皆さんは医者という立場にあるがために、人間の苦しみの秘義に幾度となく直面せざるを得なくなります。

苦しみのキリスト教的意味についての使徒書簡の中で書いたように、キリストは人間になられたことによって、特に自らに苦しみを受けられたことによって、人類の苦しみ、苦悩に大きな意義と贖いの価値を与えられました。すなわちキリストが私たちの永遠の救いを成就されたのは、まさに御自身の苦しみによってでしたから。苦しみは、私たちに永遠の愛を示すために神が選ばれた手段であり、この苦しみを経ることで私たちに贖いの恩寵を与えられたのです。

イエズスは身を挺して、苦しんでいる同胞の世話をすることを教えられました。使徒たちを遣わされる時にこう仰せられました。「病人を治し、(神の国は近づいた) と知らせよ。」(ルカ10・9) 痛みを除いたり病

説教・講話・書簡等の抄訳

人を看護する職業は、道徳的価値の大変高い職業です。と同時に、高い道徳基準と倫理的行為を要する職業でもあります。ことに根本的な道徳（倫理）上の真理が問われる世の中にあっては、特にそうです。例えば私たちと同時代の人々の間にも安楽死をもって人生の終りを迎えるのをよしとする人々がいます。安楽死を人間の苦しみを解くいたわりの解決策だと考えてのことでしょうが。

麻酔医学の分野で働いておられる皆さんは、その仕事上苦しんでいる病人から痛みを取り除くのが目的ですから、安楽死という同情的解決法をうるさくせがむ人々の嘆願には、とりわけ敏感でいらっしゃるでしょう。苦痛がひどくしかも長びくばかりという時にはこれも無理からぬことです。個人的な感情で安楽死を願う気持には同情の余地がありますが、そこから必然的に問題となってくる諸々の客観的事実や根本的真理を見失ってはいけません。

この点に関しては、私の承認を得て教理省が出した「安楽死に関する指針」に目を向けてください。この文書の11番で、目下の問題をわかりやすく取り上げています。「耐えることの不可能なほどのあまりにもひどい苦しみがいつまでも続くとき、人は激情に動かされるとかその他の事情から、自分を死なせてくれるよう依頼することも許されるに違いないとか、この人に死を与えてもかまわない筈だとかの確信に至るようなことさえ場合によってはおこりえよう。これらの場合、そのような確信の下に行為する当人の、神の前の罪はあるいは軽いものであるとか、または全くないということなどもことによるとありうるかもしれない。だがこれは、たまたま良心が、恐らくは善意で、自分では気付かないまま誤った判断におちいっているだけの話であって、このような致死が、それ自体として常に拒否されるべき倫理的逸脱の行為であることに変りはないのである。重態におちいった病人が殺して欲しいと求めることも場合によってはありうるが、これは安楽死を本心から願っているものと解すべきではない。実際それは殆どの場合、苦しみの中からの、助けと愛を求めての切実な懇願に他ならない。」

人間の尊厳をおびやかすような重大な道徳悪や脅威に直面するとき、私たちはしっかりと足をふまえていなければなりません。どんな医学的解決策であろうと、自然の法にそむき、神の御言葉が明かす真理に反するものは、本当に思いやりのあるものではないという信念をしっかりもっていなければなりません。医者も看護婦も医療専門家も誰一人として、自分のであれ他人のであれ、生命の終りを決定することはできません。この世の創造主、私たちの救い主である神のみがなされる領域なのです。

医療という立派な仕事に携っていると、当然沢山の難しい倫理上の問題に直面することでしょう。それらの問題に対しては博識な医学知識に加えて、良心の判断にも細心の注意を払わねばなりません。そこで医学に携る人々の真剣な倫理教育（形成）が必要になってくるわけです。この様な教育（養成）は次の事実に照らしてみると適当かつ必要なのです。つまり、医療の目的はその専門知識を生かして各患者を入念に治療するばかりでなく、全人格に見合った全人的治療を施すことだからです。この分野全体に対して教会は大きな関心をもち、役に立ちたいと考えていることを約束いたします。教会は道徳指導と霊的遺産を生かした助力を惜しみません。私たちは互いが助け合ってこそ、苦しんでいる人々に最大限役立つことができるのです。

この事に関しては私が数年前「世界医学機構」に呼びかけて強調した点を思い起してください。「十九、二〇世紀にかけての医学の驚くべき発達には敬意を払わずにはいられません。しかし、お気づきのように、今こそ科学と倫理面の亀裂を失くして両者の深い連帯をもう一度見つけ出す必要があります。皆さんの対象は人間であり、倫理の枠を守ってこそ人間の尊厳は保たれるのです。」

（九・八）

全人類に及ぶ原罪の結果

「罪」シリーズ❺

1 トリエント公会議は、原罪に関する教会の信仰をおごそかに述べています。今回は、原罪が人類に及ぼす影響について、公会議が何を教えているか考えてみましょう。

2 トリエントの教令はまず次のように述べています。アダムの罪は子孫に伝わった、つまり人祖の子孫であるすべての男と女、すでに神との友情を奪われた人間の本性をもつ彼らの後継ぎに伝わった、と。

トリエントの教令（Dz1512参照）は、アダムの罪がアダム自身を堕落させたばかりでなく、全子孫をも堕落させた、とはっきり述べています。アダムは、自分自身のみならず「私たち」にも、神から与えられていた原初の義と聖性とを喪失させました。

アダムは肉体の死と他の罰（罪の結果）ばかりか、霊魂の死である罪をも全人類に伝え残したのです。

3 ここで、トリエント公会議は聖パウロのローマ人への書簡を引用しています。すでに、カルタゴのシノドスがこの書簡を参照しており、その教えは繰り返されて教会内に広く行き渡っていました。

アダムの罪は出生によって伝わった

パウロの書簡は現代語訳で次のようになっています。「一人の人によって罪が世に入り、また罪によって死が世に入って、すべての人が罪を犯したので死がすべての人に及んだ。」（ローマ5・12）　ギリシア語の原典では「彼において全ての人が罪を犯した」とあり、旧ヴルガタ訳での表現は「（一人の男）においてすべての人が罪を犯した」となっています。しかし、ギリシア人たちは初めからヴルガタ訳の「～において」とは、「何故なら」とか「～であるので」の意味であるとはっきり理解していました。そしてこの意味は、今日現代語訳でも一般に容認されています。けれども「彼において」という表現に解釈上の相違があったとしても、聖パウロのテキストの根本的な真理、すなわちアダムの罪（私たちの人祖の罪）がすべての人類に影響したということには変りはありません。その上に、同じ書簡の中で使徒は、「一人の人の不従順によってすべての人が罪人とせられた」（ローマ5・19）、「一人の罪によって有罪の判決がすべての人に及んだ」（同5・18）と書き、アダムの過ちを全人類の罪深い事態と結んでいるのです。

4 今引用した聖パウロの言葉は全人類に対するアダムの罪の影響について私たちの信仰を啓発してくれるものです。また、カトリックの数多の注釈や神学者たちが、人間の起源についての科学的説明の価値を信仰の知恵で検討する時にも、この教えに常に導かれています。

特に神学者と科学者とのシンポジウムに対する教皇パウロ六世の言葉は確実な根拠があり、この問題に関する深い探究のための刺激となるでしょう。「現代の著述家たちの与えた原罪に対する説明が、皆様には真正なカトリックの教えとは協調できないものにみえるであろうことは明

不変の教え

むち打たれるイエズス

らかです。多祖説という立証されない前提から出発するこうした著述家たちは、このような悪のかたまりは、罪から人類の中に出てきたこと、そしてその罪はまず第一に歴史の初めに存在した『最初の人間』アダムの不従順であったこと（AAS『使徒座公報』LVIII 1966. 654）を、多かれ少なかれ否定しています。

5 トリエントの教令はもう一つの声明を含んでいます。つまりアダムの罪は、悪い手本をまねることによってではなく、出生によってその子孫の全てに伝えられるということです。教令は「このアダムの罪は起源が一つであり、模倣によってではなく、遺伝によって伝えられて、すべての人に一人ひとりに固有のものとして内在するものである」(Dz 1513)と述べています。

従って、原罪は自然の出生の過程を経て伝わるのです。教会のこの確信は、公会議も言及している幼児洗礼の実践にも示されています。新生児は自罪を犯すことはできないけれども、教会の何世紀にもわたる伝統に従って、罪の赦しのために誕生後間もなく洗礼を受けるのです。教令は次のように述べています。「幼児も罪の赦しのため、そしてこの再生によって、出生によって受継いだ汚れから清められるために洗礼を受けるのである。」(Dz 1514)

▼贖いの秘義との関係

こうして見てくると、アダムの子孫における原罪は、自罪という性格はもっていないということが明らかになります。人祖の過ちによって、その超自然的目標からそらされた本性における、成聖の恩寵の剥奪ということなのです。それは「本性の罪」であり、類推して「自罪」に比較し得るものにすぎません。罪を犯す前の原初の状態では、成聖の恩寵は人間の本性に与えられた超自然的な「素質」のようなものでありました。恩寵の喪失ということは、当然罪の本質にかかわることです。なぜなら、罪とはこの賜を与えてくださった神の意志を拒絶することだからです。人間の本性は、その超自然的な豊かさの基である成聖の恩寵を失ってしまいました。そして人祖は、人間の世代が始まった時に、彼らが存在した状態でこの本性を全ての子孫に伝えたのです。それゆえ人間は成聖の恩寵を失ったままで受胎し、生れるのです。遺産としての原罪の本質を構成するものは、その起源とつながった人間の「最初の状態」であったことは明らかだといえるでしょう。

6 今日のカテケージスを終えるに当たり、このシリーズを始めた時に述べたことをもう一度強調せずにはいられません。すなわち原罪は、私たち人間のために、私たちの救いのために、人間となられた神の御子イエズス・キリストによって成し遂げられた贖いの秘義と絶えず関連させて考察しなければならないということです。御託身（受肉）の救いの目的についての信経の条項は、主としてそして根本的に原罪に触れています。トリエント公会議の教令もまた、もっぱらこの結末に関連して構成されています。それは聖書、とりわけ「原福音」と呼ばれる、来たるべき「サタンの征服者」「人間の解放者」についての約束に出発点をおく全聖伝の教えの中に挿入されているといえるでしょう。これらの事はすでに創世の書（3・15）をはじめとして、その後聖パウロのローマ人への書簡においてこの真理がより一層十分に著わされるに至るまでの、多くの書の中に著わされています。事実、使徒によればアダムは「来たるべきお方の前兆であった」のです。

（ローマ5・14）「一人の罪によって多くの人が死んだとしても、神の恩寵とこのただ一人の人イエズス・キリストの恩寵による豊かな賜は、多くの人々の上にあふれんばかりに注がれたからである。」(同5・15)

「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とせられたように、一人の義によって多くが義とされた。」(5・19)「つまり一人の罪によって有罪の判決がすべての人に及んだように、一人の正義の業によって命を与える義もすべての人に及んだ。」(5・18)

トリエントの公会議は、その教えの隅石として、特にパウロのローマ人への書簡を参照していますが(5・12)、それはこのテキストが罪の普遍性と贖いの普遍性とを肯定していると判断するからです。公会議は幼児洗礼を実践するよう訴えていますが、それは原罪――人祖から本性と共に受けた万人共通の遺産――が、イエズス・キリストにおける万人の贖いの真理と密接な関係があるからです。

四旬節第二主日の今日、マリアの祈りを唱えて、苦しみの玄義の第二玄義（むち打たれるイエズス）について黙想しましょう。

福音史家ルカは、イエズスが十字架につけられる前に三度の苦しみをお受けになった時の様子を記しています。

衆議所の前で、「イエズスを監視していた人々は、イエズスをあざけり、なぐり、目隠しして、『当ててみろ、おまえを打ったのはだれだ』と聞き、そのほかいろいろ侮辱のことばを浴びせた。」(ルカ22・63～66)

誰よりも「預言者」の名に値する御方、神の名・神の力において語る方が、その人性において、神の（みことば）として嘲りをお受けになりました。

ヘロデ・アンティパスの前でも同じことが繰返されました。「ヘロデは兵卒とともにイエズスを侮り、嘲笑い、はなやかな服を着せて、ピラトのもとに送り返した。」(ルカ23・11)

ピラトの前でも。「ピラトは……『（打ち）こらしめてからゆるすことにする』と言った。」(ルカ23・16)

打ちこらしめるとはどういうことなのでしょうか。「ピラトは、民を満足させようとしてバラバを放し、イエズスをむち打ったのち十字架につけるために引きわたした。」(マルコ15・15)

先端に結び目や丸い金具のついた革のむちを用い、数人の兵卒が打つローマのむち打ちは、奴隷や死刑を宣告された人への罰とされていました。恐ろしい罰で、拷問の間に死ぬこともあったのです。

イエズスはこの残忍きわまる拷問から免れることをお望みにはなりませんでした。私たちのためにそれを堪え忍ばれたのです。

ロザリオの第二玄義（苦しみの玄義）を黙想していると、私たちも苦しむイエズスの弟子になるよう招かれていると強く感じます。イエズスは御体でも私たちのために祈ってくださいました。御父の御旨に従って、名状しがたい苦しみに御体を従わせられました。御自身を御父と人類に捧げられたのです。人間としての測り知れない苦しみを示すとともに、イエズスにおいて私たちに与えられる刷新と救いに与れることをも示してくださいました。

イエズスの模範に倣って、私たちも体で祈りを捧げましょう。節欲、隣人への愛、肉体的苦行など、努力を要する難しい行いは、「キリストの苦しみ」(コロサイ1・24)と一つになって、償いとして神に捧げる祈りと犠牲になるのです。

節制と愛徳を実行する毎に「むち打ち」を受けましょう。イエズスの苦しみの秘義がもたらす実りと賜です。それは私たちを一層奮い立たせ、鼓舞し、内的に変化させるでしょう。

全てを神に委ねることができるように、悲しみの聖母に取りなしを願いましょう。

（二・一九）

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部八十円　送料実費
■一年予約九〇〇円　送料六〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393